

---

# 冥土喫茶へ いらっしゃ~い！

高遠響

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

冥土喫茶へ いらっしゃい！

### 【NZコード】

N1371BA

### 【作者名】

高遠響

### 【あらすじ】

ここは大阪、猫間川商店街。喫茶サニーサイドの常連客は静子バアサンと笑子バアサン。ある日店主が体調不良で入院することになり、この二人のバアサン達がサニーサイドを預かる事に……。

嗚呼、げに恐ろしきは「大阪のオバハン」が進化した「大阪のバアサン」。

濃～い大阪の笑いと人情をご賞味あれ。

年寄りの朝は早い。というか、今時的小学生よりも早い時間に布団に入るものだから、当然目が覚めるのも早いのだ。八時前にベッドに潜り込んでテレビを眺めながら寝てしまうとして、そこから八時間寝たとしても朝の四時にはお目覚めだ。そこからもう一度寝直そうと思つたところで、若い頃と違つて仕事でくたくたになつてゐる訳でもなく、毎日嫌というほど睡眠時間を取つてゐるものだから、それ以上連續で眠りにつけるはずがないのである。

「だからね、あんたの悩みは悩みやないの」

静子は訳知り顔で厳かにそう言い放ち、コーヒーを一口飲むと、田の前でしょぼくれている幼馴染の笑子の顔を見た。彼女の不眠の悩みはもう数えきれないくらいに聞いていて、耳に出来たタコは既に海坊主サイズのオオダコに成長している。だが、しわに埋もれそうになつてしている田をしょぼしょぼと瞬かせて見ているのを見ているとやっぱり可哀そうに思えてくるところが自分でも不思議だ。まあ、ここいらで少し弁護をしておいてやらなくてはなるまい。静子はうんうんとうなずいて見せた。

「まあな、あんたは昔から神経質やさかい。しうつもない事をくじくじ考へてるから余計に寝られへんねんな」

「しようもないで、えらい言われようやな……」

先ほどから静子にやられっぱなしの笑子はますますしょぼくれて田の前のコーヒーカップに入れっぱなしになつていてスプーンを指先でいじくつた。ただでさえ丸い背中がますます丸く小さくなる。

静子は自分のコーヒーを指さしながら言つた。

「そんなん言つてゐるくせに毎日ここに来て、コーヒーなんか飲んでるからますます寝られへんねん。せやけど、ここのコーヒー、薄いで。水臭いコーヒー。あ、コーヒー臭い水か？ ここのコーヒーで寝られへんところのはありえへんやろ。なあ、厳ちゃん」

カウンターの中で新聞を読んでいたマスターの厳ちゃんは渋い顔で静子を見た。

「姉ちゃん、他の客の前でそんな事言わんといでや。なんも混ぜてへんで。それに姉ちゃんら、いつもアメリカンやから水臭いねん。たまにはエスプレッソでも入れたるか」

静子はがははと笑いだした。

「そんな訳のわからん横文字のコーヒー飲んだら口腫れるわ」  
厳ちゃんは「訳のわからんのはあんたやがな」と口の中で呟きながら新聞に再び目を落とした。

「ああ、それにしても、なんやしんどいわ……」

笑子はふうっとため息をついた。

「こ」は猫間川商店街の端っこにある喫茶店サニーサイドである。猫間川商店街は大阪の下町に戦前からある古い商店街で、戦災を間逃れ、奇跡的に平成の世までその姿を残していた。昭和の五十年代までは活気あふれる下町の空気に満ち溢れていたが、バブル期にさしかかると周辺地域の再開発が進み、だんだん客足が遠のいていった。そして、平成の「こ」時世になるとその店舗数は昭和の時代からは比べ物にならないくらいに激減していく、数える程になつていて。いわゆるシャツターリー通りというヤツだ。暗いアーケードの通りを覗きこむと、ぽつんぽつんと灯りが見える。そういう店はたいがい他所に別の店舗を構えていて、元の店を倉庫代わりに使っているか、隠居した年寄りが長年の習慣でとりあえず店を開けているところばかりだつた。

そんな中でこの喫茶店サニーサイドは稀有な存在だ。商店街の一番入口に構えているため、表の通りを歩く客を呼び込む事に成功していた。そのお陰で開店から十年になるがなんとか潰れることなく回っている。

そのサニーサイドで毎日「水臭い」コーヒー一杯で何時間も粘る「こ」の一人の常連客、静子と笑子はこの近所に住む後期高齢者、平た

く言えば、おばあちゃん達だ。猫間川商店街も古いが、この二人も大概古い。そして生まれも育ちも猫間川商店街の近所という極め付けだ。

真っ白になつた髪を孫に選んでもらつたカチューシャでまとめている、やたら元気な老婦人が静子だ。名前とは正反対に、威勢が良くてあつけらかんとした物言いは周りの人間を閉口させるのに十分だった。何を言つても堪えないおばあちゃんに静子の息子夫婦や孫達はさんざん振り回されているらしい。本人は全く自覚がないのだが、少々おせつかりで、あちらこちらに顔を突つ込んではとんでもない事をやらかすのだ。よく言えれば、責任感と面倒見がいいという事なのだが、悪く言えれば「おせつかりのいつちよかみ（なんにでも顔を突つ込んでくるという大阪弁）」だ。孫達からは密かに「ナンギーズの四番バッター」などという称号を頂戴している。もつとも本人はどこ吹く風で、週一回通つていてるいきいきサロンという高齢者の「ミユニティー」では自称「超がつくほどの人気者」などとたまっている。どこまで本当だかよくわからないが、全く人見知りしない大らかな、悪く言えば団々しく厚かましい性格は人好きするには違いない。身体の方はと言うと、これまたすこぶる元気なようで、少々足元がふらつく事はあるが、気がつけばその辺をうろついている。近所でも評判の名物ばあちゃんだ。

もつとも頭の中身はと言うと八十五歳という歳に相応して、物忘れがひどくなつてきているらしい。本人も自覚は十分にあるらしいのだが、すぐに

「あ～、最近うちもボケてしもて。いやあ、そんな事あつたかいな。そんなもん、さつき食べたモンも忘れてまつせ」

などと逆手に取つて周囲を煙に巻いてしまおつとする。まさしく「ナンギーズの四番バッター」にふさわしい。

一方の笑子は静子の幼馴染で、やはりこの界隈に長く住んでいる。もつとも結婚して夫の転勤で一度は大阪を離れたのだが、三十年ほど前にもう一人になつたのを機に舞い戻ってきた。五年前から出戻つ

て来た娘と一緒に住んでいる。

笑子はこれまた名前とは正反対で、地味で控え目な、ついでに言うならば神経質で心配性のため、いつも眉間に縦皺が寄っているようなおばあちゃんだ。小柄で細い体はちょっと強い風が吹けば飛んでいくのではないかと思われそうなくらいに頼りない。あっちが痛い、こっちが痛いと言つては毎日近くの整骨院に行って電気を当て、その後サーーサイドに寄つて静子とだらだら喋つて過ごすという生活パターンだ。

若い頃から何かにつけポロポロと病気を重ねてきたためか、自分で虚弱体質だと思い込んでる。もっとも本当に虚弱体質でよれよれなら、八十五歳までも生き永らえるという事もなさそうなものだ。その証拠に整骨院の先生からは、年相応の体の不具合はあるものの、すぐさまアチラに行くような緊急性の高い病は持つていないと断言されている。

「歳やからな、そら、あっちも痛いしこっちも痛い。明日死んでもしゃあないわ。せやけど、ちょっと動いたらこじらへんがきゅーと痛うなつて。ちょっと動くとドキドキするやう? これがまたつらいんや。なんで治らんのやうなあ。ああ、きつとむづじきお迎えが来るわ……」

と、情けなさそうに言つのが口癖だ。あきらめているのかそうでないのか、悟つてゐるのかいなか、よくわからない揺れるお年頃なのである。

そんな二人が毎日のようにサーーサイドに立ち寄つては、毎日のように同じ会話をくりかえすのだから、一番かわいそなのはそれを毎日のように聞かされ、そして大した売上にもつながらないサーーサイドのマスター、厳ちやんだらう。

厳ちやんは静子の弟で、静子より十五歳年下の七十歳だ。老年と呼ばれるところに足を突つ込んでいるものの、白髪の交じつた髪を後ろでちょんとくくり、赤いチェックのカジュアルなシャツとジーンズというアメリカンな格好が似合つ男性だ。昔は和菓子職人だつ

たが、実は和風よりアメリカンにずっと憧れていた。サードサイドは厳ちゃんが長年抱いてきたアメリカンドリームが満ち溢れていて、落ち着いた雰囲気ながらも、アーリーアメリカンのインテリアや古びたジュークボックスが置かれてあり、BGMにはいつもオールディーズが流れている。

姉弟とは言いながら、静子は厳ちゃんの親代わりと言つてもいい。忙しい両親に代わつて赤ちゃんの頃の厳ちゃんの世話をしたのは静子なのだ。おかげでお互いに老人と呼ばれるような歳になつていても関わらず、厳ちゃんは静子に頭が上がらないと来ている。

ちなみに二人の実家は饅頭屋で、後を繼いでいた厳ちゃんが十年前に一大決心をして廃業し喫茶店サードサイドを作つたのだ。その時も静子が結構な金額の援助をしたという経緯があり、厳ちゃんは結局いつになつても姉ちゃんに頭が上がらない。そんなこんなで、静子の格好の暇つぶしの場とされても文句も言えないのだ。

アーリーアメリカンとはまるで縁のなさそつな二人のおばあちゃんはランチの直前までサードサイドの特等席を乗つ取つて時間をつぶし、用事のない日は昼からもやってきてまた朝と同じような話をしながら時間をつぶすというのが、ここ十年の日課となつていた。特等席である窓際の席は、この二人にとつては甲子園の年間予約シートのようなものだらう。

「そう言えば、厳ちゃん」

笑子がカウンターの中へと目をやつた。厳ちゃんは不景気な顔で新聞を読みふけつてゐる。この時間帯は大概この二人の後期高齢者以外に客がないことが多い。不景気な顔にもなるというものだ。

「あんたも体調悪いって言うてたんちやうの。病院は行つたんかいな」

「あ？ ああ、明日朝から行つてくるよ」

厳ちゃんは新聞を置んでカウンターの下に置いた。

「ほんなら明日は休業か？」

静子と笑子は顔を見合わせた。一人にとつては大問題だ。

「明日は明恵に頼んであるから」

明恵とは厳ちゃんの嫁である。普段はモーニングとランチの時間帯に調理を手伝いに来る。が、普段から無口で無表情なのでカウンターの中についても存在感はほとんどない。たまに口を聞いても取りつくしまらないといつぱりにぶつかりほつなので、明恵がいたからと云つて会話が弾むこともなければ、場が明るくなるということもない。そもそもあまり接客は好きでないらしい。

「そうか。明恵はんか……」

静子が声を潜めた。

「うちらの事、うるわしうつみるからなあ。長崎はなでかへんで」

「なんやで?」

耳が遠くなつてきている笑子が聞き返す。

「明恵はすぐにわちらの事をうるわしうつみるから、長崎はだけへんなあ!」

静子はでかい声で言い直した。せっかく声を潜めて云つた意味がない。厳ちゃんは顔をしかめた。うちの嫁やのつても、このばあさん達相手うつむかうしない人はおらんやろ。……。心中で呟きながらも、静子には言えないと云うが悲しい厳ちゃんなのであった。

› 続く

## メイド・デビュウ！ —（後書き）

この物語の登場人物・登場する場所は架空のものです。猫間川はかつて実在した川ですが、現在は埋め立てられ地図上には存在しておりません。

翌日静子がいつもの時間にサニーサイドにやってくると、カウンターの中には明恵がいた。すんぐりした体に地味な茶色いエプロンをかけ、いつものように仏頂面でモーニングのサラダを作っている。

「おはよつわん」

静子がにぎやかに入ると、明恵は無愛想に「いらっしゃいませ」と咳き、入ってきたのが静子であるとわかるとますます無愛想な顔をした。まるで挨拶をして損したとでも言いたげな雰囲気だ。

明恵の代わりにモーニングを食べていた常連客の若い男性が返事を返す。

「ばあちゃん、おはよつわん。相変わらず元気やなあ」

「あれ、西さんとこの。久しづりやないの。今日せんじこのんびりやな」

「今日は定休日やねん。朝寝坊や」

「早いこと朝！」はん作ってくれる嫁も「こーゼ」

「大きなお世話や。そんなん言つなら、紹介してや」

静子はがはと笑いながらいつも席に座る。

「あかんあかん。うちの知つているのは監もつ姥桜おやなづる、いやいや通りこしてドライフラワーになつとるわ」

「こくらなんでもばあちゃんの友達はいらんわ。ばあちゃんの孫の友達くらいやつたら嬉しいなあ」

「ど厚かましい。そんなん自分で探さなあかん。じんなどりで油売つてんと、どじき行つて可愛いネエチヤンつかまえといで。……あ、油売つてるんとちやつた、朝あさ飯買つてくれたはるんやつたわ。毎度おおきに」

ポップコーンか煎り豆か。一瞬にまくしたてると、息継ぎもせずにカウンターへと声をかける。

「明恵はん、ホットのアメリカン」

静子の注文に明恵は無言で食器棚から白い「コーヒー」カップを出してきた。カップとソーサーが触れる固い音がやたら耳につく。それだけでも充分に威圧的だ。

「……相変わらずやなあ。」なんんで一日大丈夫かいな」

静子は眉をひそめる。接客などと言つものは笑顔が第一である。ましてここは大阪だ。笑顔と愛想と、懸にもつかない世間話が商売成功の秘訣の一つなのだ。

「これはほつとかれへんなあ……」

静子は腕組みをして一人うなづく。どうやら今日一日この場に留まって接客のサポートをしてあげようとして、余計なおせっかいを思いついたようだ。

しばらくすると笑子がいつものよによたよたと現れた。

「おはようさん……」

小さい声であいさつをしながら入つてくると、カウンターの明恵はちらりと視線を投げてよこしただけだった。静子は思わず唇をへの字にゆがめ、笑子に田配せした。

「なんや、やつぱり今日は敷居が高いな」

笑子は相棒の前に座ると声を潜めて囁く。

「せや。なんあんなに無愛想なんやろな。損や」

静子はしかめつ面をした。しゃべりの静子にはこれほど無口で無愛想な明恵が全く理解できないのだ。もつと理解できないのは嚴ちやんと明恵が見合いではなく大恋愛の末に結婚したという事実である。嚴ちゃんとは高校の先輩後輩の仲だつたらしいから十五、六歳からの長い付き合いだ。なんやかんやと言いながら、もう五年もすれば金婚式というのだからまつたくもつて理解できない。

「そりなあ、確かに蓼食う虫も好き好きとは言つけどなあ……」

静子は失礼千万な事を呟いた。

「アンタいらん事言いなや」

笑子にたしなめられ、静子はちょっと肩をすくめた。

午前中の客はぽつぽつと、しかしながら入れ替わり立ち替わりで

途切れる」とはない。しかし、どの客も扉を開けてカウンターの中の明恵を見ると一様に「ありやあ……」といつ顔をする。そして注文のモーニングを平らげるときもくわと帰つてこゝのだ。

「これはますます問題やなあ」

静子は客の反応を観察しながら渋い顔になつた。

「明恵はん、最近ますます無愛想になつたんだけやつか?」

笑子までが身を乗り出して客の反応チヨックをし始めた。

当の明恵は時々一人に皿をやつて、ぴくぴくと頬をひきつらせていふ。「まだおるんかい。はよ、帰つたらええのに」とでも言つたところだらう。もつとも口づるわい小姑一人に居座られては明恵でなくとも無愛想になつと嘗つものだ。

居心地の悪い空氣の中、サニー・サイドの午前中が過ぎていつた。昼のランチタイムが過ぎて店が落ち着いた頃、厳ちゃんが帰つてきた。

「おかえり」

明恵が無表情に、しかし素早く声をかけた。客に対する声掛けよりも夫に対する声掛けのスピードの方が早いといつのがなんとも妙な具合だ。

「おかえり、どないやつた?」

カウンターに座つていた静子もすかさず声をかける。

厳ちゃんは静子に皿をやると、ぼそつと呟いた。

「なんや、姉ちゃん、まだおつたんか」

「家で昼ごはん食べてからまた来はりました」

明恵が仏頂面で答える。

「なんや、それ。どうせやつたらランチ食べたらHのよ。たまにはアメリカンコーヒーより高いモン注文せえよ」

厳ちゃんは元氣のない声でぶつぶつ言つながらカウンターの椅子に腰かけた。

「顔見るなりHラニ言われよつやがな。コーヒー一杯でもお客さんやで。だいたいここのランチは量多い。よつ食べきらんねん。年寄

り向けの量にしてくれたら食べるわ。お代も年寄り料金やで。老人  
バス利用可でもエエな。……で、なんや、その手は」

しゃべりまくる静子を厳ちゃんは手で制していた。

「悪いけどな、今そんなしようもない話してる気分ぢやうねん」

そしてどよよ～んと濶んだ表情で明恵を見上げた。明恵は眉をひそめた。

「悪かったん?」

「せや……。バリウム飲んで写真撮つたんはええんやけどな、なん  
か出来てるらしいわ」

「……癌か?」

「いや、取つて、培養検査してみなわからんて。どうにしても入  
院や……」

明恵が石のように固まる。厳ちゃんはすっかりしょぼくれてがつ  
くり肩を落としている。よほどショックだったのだろう。一気に十  
歳ほど老けこんだように見えた。

「いつ入院するん」

明恵はへこんでいる夫を覗き込んだ。

「来月」

「一週間もあるやんか。大丈夫なんか。そんなにほつといて

「しゃあないがな。病院のスケジュールやねんから」

厳ちゃんは暗い顔で答える。明恵はますます固い表情になつた。ま  
るで明日にでも死ぬような重苦しさである。静子はため息をついた。  
「あのなあ、厳ちゃん。今からそんな深刻な顔してどないすんねん」

静子は腕を組んで大声で喝を入れる。

「あんたかで七十や。あちこちガタも来て当たり前や。ひちかて七  
十くらいからあつちもこつちも具合悪いけど、生きとひ」

厳ちゃんは恨めしそうに静子を見る。

「さつさと取るモノ取つておいでや。よつ考えてみい、仮に悪いデ  
キモンやとしても、年寄りはあんまり悪くならへんらしいやんか。  
若いモンと違うて病氣も元氣ないねん。ほれ、しつかりせんかいな、

「情けない」

「……姉ちゃんはホントに能天氣やなあ。『ひやまじいわ』

「姉ちゃんは思わず苦笑いした。

「そらまあ、そりやな。とにかく入院の準備もせなあかんし、店の事、明恵に頼みたいんやけど」

「そんなん困るわ」

明恵は間髪を入れずに拒否した。

「私が毎日一人で店の事をできるはずないや。調理はともかく接客は苦手や。わかつてんや」

無口な明恵にしては長いセリフだった。よっぽど嫌なのだ。

「せやけど、ずうつと閉める訳にもいかんし」

姉ちゃんは渋い顔になった。もじろん明恵が接客を苦手としているのはわかっている。しかし、この店は地元の常連客で持っていると言つてもいい。これから先、入院して手術して、また入院して、通院して……などと言つときれどきれの営業では常連客も離れてしまつ。

「なあ、明恵。頼むわ」

「あかん」

「なあて……」

「あかんもんはあかん」

明恵は頑として首を縦にふらない。何度も同じつとつとしていたが、どうも埒があかない。だんだん姉ちゃんの声が険しくなってきた。

「こんなに頼んでんのにあかんのか？ なんでやねん！」

「うちがずっと接客なんかしたら、ほつといても密は離れるわ」

突き放すような言い方だ。

「なんでそんな事！」

滅多に怒らない姉ちゃんの顔が赤く染まる。明恵はつこつと身をひるがえし、流しに向かい無言で皿を洗い始めた。

険悪な空氣。それとは対照的なカントリー調のBGMが空々しく

流れる。

「やれやれ……」

静子が顔をしかめた。

「ほんまにじゃないもしゃ あないな、あんたらは。ほんなら明恵はん  
がまかないをすればエエ。客の相手はつちがしたる」

「はあ？」

厳ちゃんの口がぽかんと開き、流しでは明恵が持っていた皿を一枚落つことした。

「つちはまかないはよつせんけど、客相手は大丈夫や。なんせ若い頃は饅頭屋の看板娘やつたんやからな。あんたは知らんやろけど、うち田当ての客も多かつたんやで」

えへんと胸を張る。

「あ、あのなあ、姉ちゃん。気持ちはありがたいけど

「なんや？ 不服か？ こここの常連客のおおかたは知つてゐるで。皆  
うちにはよう声かけてくれるしな。厳ちゃんよりもつちの方がよう  
喋つてるわ」

「そらまあ、そりやけど……」

お化け屋敷やと思われるで……といつ言葉を厳ちゃんは必死で飲  
み込んだ。そんな事を言おつもにならえらい事である。持つている  
杖で殴られそうだ。

「姉ちゃんかて歳やから。毎田ここで仕事なんて、なあ。体力が持  
たんや」

「何言うてんねん。失礼な」

静子は憤懣<sup>ふんまん</sup>やるかたなしといった表情でどんつとカウンターをた  
たいた。

「毎日一時間は歩いてるし、階段かて平氣の平左衛門や。こないだ  
はいきいきサロンで江州音頭<sup>じょうしゅおん</sup>踊つてんで！ 知つてゐるか？ いきい  
きサロンでリポビリもしてな、リポビリの先生に『静子さんの体  
力は六十、いや、五十代や』って誉められたんやで」

「……それを言つならリハビリやん」

厳ちゃんはくらくらしながら突っ込む。

確かに静子の体力はすさまじく自分の興味のためなら平気で一日出歩いているし、喋りの「つまさはさすがに若い頃店先で鍛えただけの事はあるとは思つてゐる。たまたま腰痛がひどくなつた時に申請した介護保険でさえ認定がされなかつた。もつとも知人親戚一同は「この人が認定されたら、詐欺やと思われるやろ」と納得していつたが。件の腰痛も何度も整骨院に通つただけで治つてしまつた。元氣すぎて、不死身ではないかと思うくらいだ。しかしながら、どこかの世界に八十五歳のばあさんをあえてウエイトレスに雇う店があるうか。

「あんた、うちの事ババアやから嫌なんやろ」

図星である。

「失礼やな。酒かて古い方が値段高いやろが。女かて古い方が味わいがあるつちゅうもんや」

「……それは違うような氣もするけどな」  
厳ちゃんは頭を抱えた。どうすれば「のじやじや馬ばあさんを思いどじまらせる事が出来るのだろうか。

「お姉さん」

黙つて洗い物をしていた明恵が振り向いた。  
「お願ひしますわ。その方が私も助かるし」  
「あ～き～え～」

厳ちゃんが卒倒しそうな顔で妻を見つめた。

「せやけどお姉さんだけやつたら万一なんかあつたら困るし、茜ちゃんに手伝つてもらわれへんやろか」

茜とは静子が同居している息子夫婦の長女、つまり静子の孫だ。  
この春から大学一年生である。

「短い時間だけでもエエから。茜ちゃんとお姉さんと交代で入つてもうつたらエエんとちやう?」

静子は横目で明恵を見た。万一なんかあつたら困るて、それはどうこう事や。ここで倒れて死んだら困るつてことか? と心の中で

咳く。

「や、そやな。茜ちゃんやつたら茜こし、別嬪やし。手ぬつてむりうたらこひらも大助かりや」

「やんの顔がぱつと明るくなつた。」

「今夜直接茜ちゃんに頼みに行へわ。姉ちゃん、ちうと書つてこてくれよ」

静子は少々不満である。高齢であるとこつだけで全く信頼されないところは侮辱だ。しかし孫の茜が手ぬつとなれば心強いことは違いない。それに茜はいわゆる「ばあちゃんっ子」で静子にとっては一番氣の合つた孫なのである。茜であれば自分も文句はない。

「よしあ。書つてこいたるわ」

静子は重々しつづなづいた。

› 続く

厳ちゃんが入院した日のランチタイム。

サニーサイドのカウンターには相変わらず仮頂面の明恵と、白いレースのついたHプロンを着た、スラリとした若い娘が入っていた。健康的な小麦色の肌に、ぱっちりした愛らしき目。陽気なオーラを身にまとつたその娘は静子の孫、茜である。

ランチタイムの常連客は茜を見ると嬉しそうに声を上げた。

「お、厳ちゃんから聞いてたけど、噂以上の別嬪さんや」

「いらっしゃいませ！ 厳ちゃんじやなかつた、マスターみたいに上手くだけへんけど、よろしくお願ひしますう！」

茜は輝くような笑みを浮かべて、カウンター席についた常連客にお冷を出した。

「おっしゃ、おっしゃ。何でも聞いてや。おっしゃんは別嬪さんことは優しいでえ。なあ、明恵さん」

「道理でうちにはキツイはずやな」

明恵の低い声。

「え、いや、そんな、そんな事ないでえ。なあ、ネエチャン」

常連客はおたおたしながら茜に救いを求めた。茜も冷や汗をかきながら「まかし笑いするしかない。

「ご、ご注文はお、お決まりですか？」

「お、おお、いつもひ、日替わりランチにするわ

「おばちゃん、日替わりランチ一つ！」

「でかい声で言わんでも、聞こえてるわ」

明恵の弦きはメガトンパンチ級の威力である。常連客も茜も震えあがつた。

と、その時、入り口の扉が開いた。

「おはようさん～。つてもうじき匂やな」

静子の声である。

「おおおおー、ばあわん待つてたで！」

救いの主の登場に、常連客の声がぱつと明るくなつた。が、次の瞬間、ひきつたような悲鳴に変わる。

「おこおこおこ、ひょっとばあさん！…」

常連客の素つ頗狂な声に思わず振り向いた茜と明恵は田<sup>た</sup>が点になつて凍りついた。茜の手から銀のトレイが落つていて、派手な音を立てる。

「お、おばあちゃん？」

「じや？ 女給さんじふわしじやひー？」

セレにはじいじで買ったのが、フリフリのワンピースに白いエプロン、じーー寧にピンクのカチューシャを白い頭に乗せた静子が立つていた。何やら化粧もいつもより濃い目に見える。

「ほんまは白いカチューシャにしたかつたんやけどな、頭が真っ白やろ？ 白やつたら田立てへんからピンクのんや。このフリフリワンピース、ええやろ～。一回じーじの着てみたかつてん」

「お・ば・あ・ち・や・ん？」

茜がよつよつ言葉を振り絞る。

「自分で意外なくらい、よう似合つかうびつくりや。最近の喫茶店の女給のねえちゃんは、じいじのカツコしてんやろ？ そう言えば、うちらが若い頃、カフエの女給さんがこんなカツコしつたわ。……あの頃は、カフエの女給さんなんて言うたら体裁悪かつたけど、今なら平氣や。ほんまの事言つとな、あの女給さんのカツコ、憧れとつてん。せやかで、かいじ（注釈・可愛らしき）やんか？」

静子は例によつて例のじーじのマシンガントークで喋り倒しながらカウンター席に座る。

「ああ、喋り疲れた。茜、お冷」

「あ、はー」

茜は慌てて落とした盆を拾つとお冷の用意をした。

「……ばあさん？」

カウンター席の常連客がしげしげと静子の姿を足の先から頭の先

まで眺める。まるで珍しい爬虫類でも見るような視線だ。

「もしかしてとは思うけど、メイドさんの真似か？」

「せやせや、今は女給さんて言わへんのやな。メイドさん言つんか。日本橋の辺り行つたらあるんやろ？ 女給さん……やのうて、メイドさんが仰山おる喫茶店」

「ばあさん、なんでそんなモン知つてるんや？」

「あんた、年寄りを莫迦にしたらアカンで。人間死ぬまで興味を失つたらアカンのや」

静子は胸を張つた。

「おばあちゃん、メイド喫茶もだいぶ下火やねんで」

茜が苦笑いする。年寄りの頭の中身のアップデートは世間の流れとはだいぶ時間差があるようだ。それでもメイド喫茶を知つてはいるというだけでも上等なのだろう。

それにしても得意そうに威張る静子の様子はただ事でなかつた。常連客は必死で笑いをこらえていたが、ついにこらえきれず噴き出した。そして椅子から転げ落ちそうになりながら笑い続ける。

「なんや、失礼な」

「ばあさんよ！ その頭のピンクのヤツ、三角の白い布に変えた方がええんとちやうか」

「……なんや、三角の白い布で……。仮さん頭につけるヤツかいな。あほ！ なんちゅうことぬかすんや」

「せやかで、ばあさん！ あんたがここでメイドやつてたら、メイド喫茶やないで！ どつ考へても冥土喫茶や……」

静子も茜も明恵も一旦停止状態に陥つた。

メイド喫茶……メイド……めいど……冥土？

三人の頭の中で漢字変換が実行されるのに数秒かかった。次の瞬間に茜と明恵がふふつと吹き出した。

「冥土喫茶！ おつちゃん、座布団一枚や！ 明恵おばあちゃん、座

布団の代わりになんかサービスせなあかんで

「ほんまやなあ」

二人はひーひー言いながら笑つ。言ひ出しつべの常連客などは涙を流している始末だ。

「なんや、なんや？！ あんたら失礼やな、何が冥土や。人を脱衣

ババみたいに言うてからに」

静子だけが一人仁王立ちになつて怒つてている。怒りながらも心中では、上手い事言つわ、これは使えるでえ……などと思っているのであつた。

こうして純喫茶サニーサイドは世にも珍しい冥土喫茶に变身したのである。

> 続く <

## テレビ・ヒュウ！

「あやー、この人が茜のおばあちゃん？ かわいいいつつー。」

翌日、茜が大学から帰ってきた時、友人を一人連れてきた。軽い茶色のロングヘアをふわふわなびかせ、毛虫も負けそうなボリュームたっぷりのつけまつげ。絵に描いたような今時の女子だ。割合素朴な茜とはだいぶタイプが違うが、随分と親しそうだつた。静子を見るや否や、今時の女の子の常套句「かわいい」を連発する。

「なんや、茜の友達か？」

静子はお冷を茜とその友人の分を用意した。

「そう！ 茜から聞いて、どうしてもおばあちゃんに会いたいと思つたんですう！ いやあ、噂通りといつか、噂以上にイケてるわ！」

アミアミのサンダルの靴底をパタパタ言わせながら喜ぶ。随分と大げさなリアクションだが、静子もまんざらではないようだ。最初はあきれていたが、やがてにんまりと笑みを浮かべた。

「そうか？ イケてるか？」

「うんうん！ イケてるイケてる！」

「そら、おおきに！」

二人で顔を見合させてイヒヒと笑う。

「好きなトコに座つてんか。まあゆつくりしていきよし」

静子はすっかり機嫌を良くしてカウンターの方へと戻つて行つた。

「ちょっとお、奈々子ー。あんまり焚きつけんといでよお」

茜は苦笑いしながら友人の肩をつづいた。

「ええやん、ええやん。うちのおばあなんかさー」

奈々子は声を潜める。

「もう、なー。論外やで。ボッケボケにボケてしまつてさ」

あからさまな言い方に茜は慌てて静子を見た。静子はカウンターの傍でおしほりとお冷の用意をしている。

「またこれがさ、ママも見る気全くなしつつー！ しょうがないと

思うけど。だつてさー、うちのおばあ、性格悪いもん。ママとも仲悪かったし。あれで介護してくれって言う方が無茶やと思ひけど

「……で、どうしたん?」

「さつさと老人ホームに放り込まれた。こないだ久しぶりに会いに行つたけど、アレはあかんわ」

「きびしー。奈々子、一応社会福祉学科やる? もつ少しお口にフ

ィルターはかからないのですかね」

茜は顔をしかめて首を振つた。奈々子はアッケラカンとしている。「でもなー、やつぱり可愛く歳取らなあかんと思うわあ。可愛げないと誰も見てくれへん。おばあちゃんには悪いけど、ちょっと自業自得…的などこもあるんやつて。それが現実ですよ、はー」

奈々子は腕を組んで難しい顔をして見せた。そこへぬつと静子が顔を出す。

「わつ」

「あのな、あんたらな、言つておくれば」

静子は厳かな表情になる。

「どんな年寄りもな、ボケとつてボケてる訳ぢやうねんで」

奈々子はペロリと舌を出す。

「あら、聞こえました?」

「年寄りは地獄耳でな。悪口は聞こえるねんでー」

奈々子があははつと笑つた。

「茜のおばあちゃんは大丈夫! 全然しつかりしてるし!」

茜が顔をしかめて首をかしげる。

「しつかりしてると言えばしつかりしてるナビ……。しつかりしきやねん。なあ、おばあちゃん」

「やかまし」

静子はじろつと孫を睨んでから、奈々子に聞いた。

「で、アンタ、注文はなんやな」

「あ、じゃあ、アイスココアをお願いします」

「はいよ、アイスココアな。アイスココア、アイスココア」

静子は口の中で「コア」という単語をまじないのよつに転がしながらカウンターへと向かつた。

「きっと今しゃべりかけたら、忘れるで」

後ろで茜と奈々子がクスクス笑いながら囁きあつて居るのも聞こえなかつた。

「」の調子のいい茜の友人、奈々子はあちこちで静子の事を言つふらしまわつたようだ。次の日から急に若く客が増えたのである。その増え方は驚異的で、ネズミ算とはいかないまでも毎日日に見えて客数が増えていつた。

「商売繁盛もええけど、」これは一体どういう事やろか

一週間して退院してきた巖ちゃんは、客で埋まつて居る店内に足を踏み入れて茫然と立ちつくした。明恵はカウンターの中で必死になつて調理をして居る。退院するといつのに、迎えに来れないと言われて拗ねていたが、この状態ではしようがない。

「静ちゃん、お水ちょうどいい！」

「静ちゃん、おあいそ」

「静ちゃん、うちカレーでお願いします」

店内は静ちゃん、静ちゃんと、静子を呼ぶ声があちこちから飛び交つて居る。

「ああああ、もう、あんたらなあ」

店のど真ん中でメイド姿の静子が腰に両手を当てて立ちはだかつて居る。

「静ちゃん静ちゃんて、静ちゃんの安売りセールとちやいまつせ！ほんまにお冷くらい自分で入れ！人使い荒いなあ、もひ。うちは後期高齢者だつせ！さつき食べたモンも忘れるちゅうのこ、一度に三つも四つも覚えられへんの！」

「きやー、そんなストレートなとこがかわいいー」

「なにが『かわいい』や。そんなことは八十年前から決まつてます」

静子は笑いながら手近なところに座つて、この若い男の子の肩をぱしんと叩く。

「……無茶苦茶や」

「……」

「あ、厳ちゃん。帰つてきたんかいな。おかげり」

静子がようやく厳ちゃんに気付いた。

「ただいま……って、なんやこの騒ぎは」

「なんや……って、商売繁盛しとるわ。いつやがな。ほれ、ぼーっと電柱みたいに突つ立つてんと、わいつかと厨房に入るー。明恵はん一人では大変やねんか」

静子は厳ちゃんをカウンターの方へと押しやつた。

「はよお願ひします」

明恵がぱちやぱちやした顔に大粒の汗を浮かべながらひりひりと厳ちゃんを見た。

「お、おつ……」

「……迎えに行かれへんと、すんません」

「お、おつ。この騒ぎでは、そら、無理やわな

「はい」

二人はぼそぼそと会話を交わしながら次々に入つてくるオーダーを作つていった。

「静ちゃん、手伝いに来ただー」

店の扉が開いて笑子がよたよたと入つてきた。

「あ、ヒミコーやー」

店の中の女の子がきやぴきやぴと喜ぶ。

「え、えみりー？」

「厳ちゃんは持つていたコップを落としかけた。

「笑子さんが手伝つてくれたはりますねん。その間にお姉さんに『休憩しー』、言つて。それと、茜ちゃんの友達が『ボケ防止にええで』とか『ボケたらどつかに放り込まれるで』とか相当吹き込んだみたいですけど」

明恵はうんざつしたよつた声で呟く。

「ほんでから、また調子に乗った若い子が何を考えてか『エミリー』なんて訳のわからん仇名をつけて……。それがまたまんざらでもないらしくて……」

巣ちゃんはあんぐりと口を開けたまま店内の歓声を欲しいままにしている一人のばあさん達を見た。笑子は確かアッチが痛い、コツチが痛いと愚痴っていたはずではないか。それが足も引きずらず、杖もつかず、静子ほどの勢いではないものの店内をえつちらりおつちらと歩きまわっている。

「あら怖いよ。エミリー やで。えらい仇名つけられてしまひ……。

こんな白髪のオバアやのに」

笑子は笑いながら手に持っていたエプロンをつけた。静子のフリフリエプロンには負けるがそれでもかなり若いデザインだ。

「……いくらボケ防止や言つても、正気の沙汰やないわ。」

明恵は顔をしかめた。

「せやかで、お前が『お姉さんに手伝つもろて』言つてんで」

「わかつてますがな。せやから文句も言えませんわ。それに、ほんまにアホほど客が入つてまつさかいな」

カウンターの中でもんだ熟年夫婦は仲よく大きな溜息をついた。

♪ 続く ♪

サニーサイドの閉店時間は早い。夕方六時には早々に店を閉める準備にかかる。巖ちゃんが一人でやつている時は、だらだらと八時過ぎまで開いている事もあったが、事実上の開店休業状態で、客は滅多にこなかつた。しかし、今や行列のできる冥土喫茶である。六時には閉めないと、次の日の仕込みやなんやかやが間に合わないのである。それに看板メイドの二人が高齢のため、これ以上働かせてぼつくり逝つてしまつたらえらいこいつちや、といつう茜と明恵の配慮もあつた。

「あ～、今日も一日よう働いた」

静子は腰をとんとんと拳で叩きながら椅子に座る。笑子もエプロンを外しながら前の席に座つた。

「ほんまやなあ。せやけどな、静けやん」

ちょっと身を乗り出す。

「やつぱり人間働かなあかんな。エエの手伝い初めて十日経つけど、なんや調子エエねん」

「そつか？」

「やつや。家帰るやろ、タゞ飯食べるやろ、風呂入るやろ、そのままでコテンつて寝てしもて。氣い付いたら朝や。十日前はあんだけ寝られへん、寝られへん言つとつたのにな」

「そりええこつちやがな。薬も飲まんとコテンつて寝て、次の日氣

いついたらあの世やつたら理想やねんけどな」

「せや、ほんまや。ピンピンコロリつちゅうヤツや」

一人は顔を見合させて楽しそうに笑う。カウンターの中で片づけものをしていた明恵と巖ちゃんが顔を見合せた。

「……デイサービスか、うけは」

「ピンピンコロリはええけど、エエでコロリだけはやめてほしにわ

「心配せんでも、エエでは死ねへんから」

静子がカウンターの一人に声をかける。まったく地獄耳である。

「うちかて死ぬ時は置の上がエエわ。いや、布団の中か」

「そう言いながらばあさん達はにぎやかに笑い転げて」る。

「いや、ほんまに、冗談やのうてな。老人ホームたら言つといひで死ぬのは嫌やからなあ」

静子は顔をしかめて身震いした。笑子が身を乗り出すようにして囁く。

「老人ホームと言えばな、葉山さんトロの民三さん、亡くならはつたらしいで。静ちゃん、知つてた？」

「聞き初めやわ。そんなん、葬式の話聞かへんかったがな」

「せやんな。どつかの老人ホームで亡くならはつて、葬式は今流行りのヤツやがな、家族葬つて。近所には声掛けはらへんねんで」

「お焼香も行かれへんがな」

「せやがな。面倒臭いんやろ、家族も。香典のお返しやなんや煩わしい言ひて、な」

「民三さんも寂しいなあ。商店会でだいぶ氣張つて世話役してはつたのにな」

「寂しい葬式は嫌やな。うちの主人の時は……」

「二人はすつかり葬式談義に夢中になつてゐる。厳ちゃんは横田で二人を見ながら深いため息をついた。

「なんちゅう景気の工工話題や。さすが冥土喫茶やな」

「ところで、いつまでこの体制でしますんや。……まさかホンマにお姉さんがアツチに行かはるまでするつもりですか」

「……いや、それは……」

厳ちゃんは「ごにょごにょ」と言葉を濁す。退院してから三日程経つが、この壮絶なメイドさん達は一向に店を辞める気配がない。客足は上々で、この一人の効果である事は間違いないのだ。色々考えると疲れがどつと増す。年寄り二人は妙に若返ったようであるが、熟年夫婦は明らかに吸い取られている。

その時店の電話が鳴つた。厳ちゃんが受話器を取る。

「はい、カーーサイドで」わこま。は？ はい。あ、確かに元ひづりですが……」

受話器を耳に当てる厳ちゃんがきょとんとしている。しばらくして、はあ、はあ、と相槌を打つていたが、いきなり悲鳴にも似た大声を上げた。

「ええええ？ そ、それは、いや、駄目って事はないんですけど。いえ、『迷惑』という事もありませんが……。はあ、明日。えらい急ですね……いや、出来たら昼の忙しい時間は避けてもらえないですか。ほんまに洒落にならんくらい忙しいんですね。朝か夕方なら、はい、ゆっくり話も出来るかと……。はい。わ、わかりました。お待ちしてます」

厳ちゃんは受話器を持ったままペロペロと頭を下げていたが、ゆっくりと電話を切った。

受話器を両手で押さえたまま、茫然としている。

「どないしはりましたん？」

明恵が心配そうに声をかけた。

「……えらいじつぢや。取材やで」

「取材？」

全員が首をかしげる。

「テレビの取材や、テレビの。まれ、夜中にやつてるや。『タウンスクープ』つてやつや」

関西圏では絶大な人気と視聴率を誇る深夜番組である。街の話題のスポーツにお笑い芸人が突入して取材を繰り広げるという内容だ。台本なしのライブ感と大阪人のアドリブの面白さが売りらしい。

「そんなんあつたかいな？」

「はよ寝るよつて、知らんわ」

静子と笑子は顔を見合わせて首をかしげる。厳ちゃんはおひおひと店内を歩き回る。

「明日の朝のうちに来ますわ。おひと付けて……。ああ、どないしたらおひとや……」

「ほんなら明日、つちは休みます」

明恵はエプロンを取りながらそつまつした。顔が引きつっている。  
「そんなテレビの取材やなんて恐ろしい。よつ出ませんわ」  
慌てて厳ちゃんが明恵の腕を掴んだ。すがるような目で懇願する。  
「そんな事言わんと、おつてくれや。俺かて心細いやないか。それ  
に取材されのは、姉ちゃんと笑子はんや」

静子と笑子は椅子から飛び上がる。

「ええ？ うちらかいな！」

「テレビ局も物好きやなあ。ほんばあせんテレビにアップにした  
ら、テレビ壊れるで」

笑子が素つ頓狂な声を上げる。

「自分で言こなはんな。せやけど、なんでつちりがテレビに出るん  
や？」

「知らんがな。大方、出入りしてる若い子がこちびってテレビ局に  
投書したんぢやうか。なんにしても、えらいこつちやがな……」

厳ちゃんは静子の言葉に上の空で答えながら、おりおりと店内に  
視線を走らせる。

「いやあ、えらいこつちや。ほんなりいつもより早よつて出勤せ  
んなあかんがな。もつ帰つて寝なあかんで。お肌に悪よつてなあ

……」

静子が嬉しそうに自分のしわしわの頬を両手で包む。それを見た

笑子がにやにやしながら茶化しにかかる。

「なにがお肌や。ちょっとむくんだぐらこの方が、しわが無くなつ  
てエエかもしけん」

「ヒトの事言えた義理かいな。せやせや、茜にも教えたらな」

静子と笑子はそう言いながらそれと立ちあがつた。随分と嬉  
しそうである。

「取材やで、取材。長生きしどつたら、色々あるもんやなあ。いや  
あ、じないしょ。じないしょ」

「エエがな。ええ冥土の土産になるわ」

嵐のような騒ぎで一人のメイドさん達が立ち去った。急にシーンとした店内に残された巖ちゃんと明恵は茫然と一人を見送るしか出来なかつた。

♪ 続く ♪

翌朝、開店前にも関わらずサニーサイドは大勢の来客で溢っていた。勿論ただのお客ではない。毎朝放送と書かれた腕章のテレビのスタッフが数人と、どんぐりのような坊主頭の若手お笑い芸人が店の中で厳ちゃんと打ち合わせをしている。カウンターの中では明恵が緊張した面持ちで人数分のコーヒーを入れたり、朝の仕込みをしたりと忙しくしていた。

明恵の目つきはまるで親の敵でも見るような空恐ろしい事になっている。どうやら極力テレビクルーの方を見ないようにしていると、緊張のあまりそんな様子になってしまふようだ。

厳ちゃんは店の片隅で進行役のタレントと打ち合わせをしている。坊主頭の甲高い声の芸人は早朝と言うのにも関わらず、やたらテンションが高い。厳ちゃんはどぎまきしながら頷くばかりである。

「……という訳でえ、撮影の段取りはまあだいたいこんな感じですわ」

若手お笑い芸人の河内家童弥は軽い口調でそう言つ。

「は、はあ。えらい簡単ですね。こんな簡単な事で大丈夫なんですか？」

厳ちゃんは目の前に置かれた薄っぺらい進行表と童弥の顔を見比べる。

「だ、いじょうぶ、大丈夫。うちの番組は素人の予測不可能な言動を売りにしてるんでっさかい、何が起きても全部エエネタですわ。僕がおばあちゃん達とお話出来たら、それでエエんです。……で、当のオネエサマ方はまだですか？」

「は、はあ。もう来ますわ。昨夜は張り切つてましたけど、テレビの撮影つちゅうのも忘れてるかもしねませんわ。もつ歳でっさかいな。都合悪なると、よう忘れはりますねん」

厳ちゃんはまだ撮影が始まつていないと、既に額には玉

のような汗が浮かんでる。あのじゃじゃ馬ばあさん達が何を言つ  
かと思つと気が気ではないのだが、テレビクルーにはそれを期待さ  
れているのだから始末が悪い。

窓の外にえつちらおつちら歩いてくる一人の姿が見えた。

「アレでつか？」

童弥は嚴ちゃんに聞く。

「え？ あ、はい。そうですわ」

「あ、来られたみたいですね。じゃ、早速カメラ回しましょうか  
どうやら一人の出勤から撮影するらしい。」

そうとは知らずに静子と笑子が店の扉を開けて入ってきた。白い  
ライトとカメラの姿に一瞬びっくりして立ちつくした。

「おはよづざいます。タウンスクープの河内家童弥です！」  
童弥がいきなり素つ頓狂な声を張り上げる。

「今日は猫間川商店街のメイド喫茶、サニーサイドのメイドさんの  
特集です」

そして、マイクをぬつと一人の方へと向けた。

「はい。このお一人が噂のメイドさん！ うわあ、お美しいですね  
～。可愛らしいですね～。古いですね～。でも、ちょっとおおおつと、  
怖いですね～！」

「怖いてなんや、怖いて」

静子が口をどがらせた。

「わあああ、とがらせた脣が梅干しみたいで愛らしいですねええ  
童弥の失礼な、しかし的を得たコメントに思わずカウンターの明  
恵が噴き出した。

「なんや知らんけど、始まつてしまつたわ」

嚴ちゃんはこいつとカウンターの中に入り、明恵の隣に立つては  
らはりしながら撮影を見守る。

「つづの店、やつぱりメイド喫茶になつたんか？ 気持ちは純喫茶  
やねんけどなあ」

「メイドちやいます。冥土です」

「景気がエエのか悪いのかわからんな、その名前。……商売繁盛はええんやけど、なんか間違うとるような気がしてしゃあないわ。……」

「……しゃあないですわ、な」

厳ちゃんは情けなさそつた顔で明恵を見る。明恵も同じような顔で夫を見返した。

途方に暮れる夫婦をよそに、撮影は順調に進んでいく。最初は緊張気味だった静子もすぐにいつもの迷調子を取り戻し、「そらあんさん、酒でも漬物でもうなぎやのたれでも、古い方が美味いんやさかい。女も古い方が味わいあるで」

ど、いつもの持論を童弥にかましている。童弥はにやにやしながらそれに応じる。

「さよか？ 一回味見させてもらわなあきまへんな。しゃあけど、腹壊しまへんか？」

「あんさん、失礼な」と言ひなはんな。少々ひからびてるけど、まだまだ行けまつせ」

「少々か～？ かなり干物……いやいや」

きわどい冗談を物おじせずポンポンとぶつける事が出来るのは、さすがお笑い芸人だ。同じ事をもし厳ちゃんが面と向かつて静子に言おうものなら、間違いなくどやされている。

童弥と静子の掛け合いに笑子は妙なテンションの高さでけりけらと笑い転げている。

一時間近くも三人で大騒ぎした後、ようやく撮影は終了した。

「いやあ、静ちゃん！ ハリワーリー！ ほんま楽しかったですわ。どうもおおきに、ありがとうございました」

「もう終わりでつか？ あんさんら、なんやつたら今からモーニングでも食べていかはつたらどういや？ なあ厳ちゃん？」

静子の提案に厳ちゃんは慌てる。もつ少ししたらいつもの常連客が訪れる時間だ。

「いやいや、残念ながら、今日はまだこれから次の取材がありますねん。またゆっくり来させてもらいますわ」

童弥は「口」ながら静子と笑子のしづくちやの手を握る。

「おばあちゃん、元気でおっしゃ！ 放送は来週になるけど、来週まで生きてなあかんで」

「おっしゃおっしゃ。来週くらいならまだ生きてるやもしれんから、がんばってみるわ」

「……うち、寝てるかもしれんわ。八時より遅つまで起きてられへん」

笑子が不安そうに静子に耳打ちする。静子はうううんと頷きながら笑子の肩をポンポンと叩く。

「厳ちゃんがビデオ撮つてくれるから大丈夫や。なあ、厳ちゃん？ ほんならここで上映会でもしようか」

「せや、それがエエわ」

笑子は嬉しそうにうんうんと頷く。

「勝手に決めてくれるな……」

と、厳ちゃんが小声で呟いた。もつとも一人の耳にはちつとも聞いていなかつたが……。

▽ 続く

静子と笑子を取材したタウンスクープの放映日の翌日から、またしても客が増えた。開店前から数人の若い娘がサニー・サイドの前に並び、静子が登場するときやあきやあと騒ぐ。静子もすっかりアイドル気分でにこやかにしわくちゃの笑顔を振りまきながら店の扉をくぐるのだ。

厳ちゃんと明恵は大忙しで、一人して毎日フル回転操業である。あまりの忙しさに茜も大学の授業が終わると飛んで帰つて来て店の手伝いをしていた。

モーニングの時間帯は静子が中心に接客をする。ランチタイムは静子と笑子が、午後のティー・タイムは笑子が接客をして静子は休憩に入る。夕方は茜が入つてくるので、老メイド一人はのんびりとお茶をして過ごす。そして六になると老メイドは帰宅、茜が接客をする。こんなシフトがいつの間にか定着していた。

恐ろしい事に一人の老メイドがいなくなると同時に、潮が引くようにならなくなる。茜は少々納得できないようだ。

「なんでおばあちゃんに私が負けるん？歳、四分の一やで？ なんでやのん？」

客のいなくなつた店内でふくれつ面である。

そんな訳で、七時前には閉店となる。

茜が帰つて、ようやくサニーサイドに平和が訪れる。この時間帯だけは今まで通りの光景に戻り、厳ちゃんと明恵は一人でゆつくりと明日の仕込みが出来る。この時間が唯一の夫婦水入らずの時間だった。

「和菓子屋してる時、こんなに忙しいのは年末くらいでしたなあ。それも店たたむ前は年末でも暇でしたわ」

明恵は店内の掃除をしながらしみじみ呟く。厳ちゃんは大きく頷いた。

「まあまあ。猫間川商店街にもちよつと世間の目が向いてきてるしなあ……」

サニー・サイドに来る若い客が、探検気分で薄暗い商店街の中を通り抜ける事が増えていた。

「小耳に挟んだんやけど、一、二件賃貸の問い合わせが来てるそやで。ほんまに、世の中、どじでどないなるかわからんもんやなあもし、この騒ぎが商店街を再生させるきっかけになればどれだけいいだろ? 今は見る影もないが、戦前から続く由緒ある商店街である。このまま人知れずひつそり消えて行くのはここで生まれ育つた者としてはやるせなかつた。

「……せやけど、いつまでこの莫迦騒ぎは続くんやろか……」

厳ちゃんは自分と明恵のためにコーヒーを淹れながら溜息をつく。店の売り上げが右肩上がりなのは嬉しいが、正直熟年夫婦一人がつましまして生活出来れば十分なのである。今さらビジネス拡大とか、実業家の道を歩むとか、そんな野望は毛頭ない。時々常連客がふざけて「冥土喫茶」邸店はどうや? などと言つが、想像するのも恐ろしい。

「身体は大丈夫なんですか?」

明恵は厳ちゃんから差し出されたコーヒーカップを受け取りながら上目づかいに夫を見た。そもそも身体の調子が悪いからといって検査入院したのがこの騒ぎの発端なのである。

「検査結果は出たんですか。あんまり忙しいからちやんと聞いてなかつたわ」

「うん。陰性やつたわ」

「そうですか。そら、良かつたわ」

「うん。良かつた」

夫婦はするすると揃つて「コーヒーを啜つた。

ささやかな夫婦の時間を楽しんでいると、店の扉が無粋な音を立てて開いた。

「あれ……もう閉店……ですか?」

入ってきたのは一人の青年だ。黒髪で長身の、なかなかイケメン男子である。白いワイシャツと黒いパンツ姿で若いサラリーマン風だ。何故か大きなボストンバッグを提げていた。

「はい。でも、いいですよ」

厳ちゃんは「コーヒーを置くと手で促した。

青年は軽く頭を下げるべくおさるおさる中に入ってきた。立ち止まって何かを探すように店内を見回す。

「あの、静子さんというおばあさんは……」

この辺りでは珍しく東京訛りのようだ。明恵が微かに眉をしかめる。聞きなれないイントネーションに尻の辺りがもぞもぞする。わざわざ大阪の外から静子に会いに来たとでも言つのだろうか。物好きなヤツもイタものだと思いながら、厳ちゃんは肩をすくめた。

「六時で帰りますねん。高齢ですからね、あんまり長く働かせて店で具合でも悪くなつたら困るので」

「そうですか……」

青年はほつとしたようながっかりしたような、複雑な顔になるとカウンター席に腰をかける。

「ホットのコーヒーをお願いします」

「はい」

厳ちゃんはフイルターの用意をし始めた。

「お客さんもテレビ見て来られたんですね？」

珍しく明恵が自分から声をかける。

「はい。とても面白かったです」

「それはどうも」

明恵はぶつきらぼうに礼を言った。

青年はしばらく物珍しそうに店内を見回していたが、厳ちゃんと目が合つと口を開いた。

「あの、マスターは地元の方ですか？」

「え？　はい。生まれも育ちも猫間川ですわ」

「なら、ご存じかも。知つていたら教えていただきたいんですが」

「はい？」

「……あの、もつ隨分昔なんですけど、この辺りに渡辺修一郎という人が住んでいたことを覚えていらっしゃいますか」

「渡辺修一郎……たん？」

厳ちゃんは首をかしげる。この辺りで渡辺と云つた名字はあまり聞いた事がない。

「昔つて、どれくらいの昔ですか？」

明恵が横から口を挟んできた。

「さあ……昭和十七、八年くらい……ほとんど七十年近くになるでしょうか」

「えらい昔の話やなあ。僕が七十やからねえ」

厳ちゃんが目を丸くする。そんな昔の話は厳ちゃんもよくわからぬ。

「渡辺修一郎といつのは僕の祖父なんです。今もう九十近いんですけど、戦争に行く前はこの辺りに住んでいたそうですね。まだ元気な頃、よくこの辺りの話ををしてたんですよ。猫間川商店街の近くの下宿屋に住んでいたらしくんですけど」

「あ～、そんならやつぱりばあさん達でないとわからないでしちょうね」

厳ちゃんはコーヒーのカップを青年の前に置いた。

「ばあさんは朝から夕方までなんで、その頃に来たら会えますよ」「いえ、僕、もう帰るんですけど……。今日の夜中の夜行バスで東京に青年はそう言ってカップを口元に運んだ。しばらく考え込んでいたが、ふと顔を上げた。

「祖父は今療養中なんですけど、もうあまり長くはないって言われてまして。九十近いので普通に考えてもそう長くはないでしょうけど……最近よくこの辺りに住んでいた頃の話をするんです。よっぽどここが好きだったんだな。たまたま出張で大阪に来てて、ホテルで偶然テレビを見て。すぐに祖父が言っている人達だつて思ったんです。猫間川商店街の饅頭屋の静子さんと米屋の笑子さんだつて。

そう思つたらぜひ祖父の話を一人に聞いてもらいたいと思つて…。もう少し早く来たら良かつたな。そしたらお一人に会えたのに」

青年は小さく笑つた。

「お姉さん、まだ起きてますやろ。呼びますわ」

明恵がいきなり電話に手をかける。

「いえ、そんな。もう仕事を上がられたのに……」

「エエんですよ。せつから東京から来られてるのに」

明恵にしては積極的だ。このところの騒ぎで少しはサービス精神というものが身についてきたのかも知れない。

「お姉さん？ 明恵です。お姉さんに会いたい言う人が来られてますよつて、ちょっと出てきてください。……風呂上がり？ そんな構いませんから。わざわざ東京から来てはるらしいんやから。今日帰りはるんやで。はよつ、お願ひします」

珍しく強氣である。敵ちゃんは皿を丸くした。明日は雨、いや吹雪になるかも知れない。

十分ほどして静子がよたよたと現れた。

「なんやの、もう。ご飯食べて寝よ思つてたのに」

ぶつくさ言いながら扉を押しあけ中に入つてくる。慌てて出てきたらしく、スッピンで、風呂上がりの白い髪はまだ濡れていてママのつねりがちぢぢりとしている。いつやって見ると静子も年相応の普通のばあさんやな……と敵ちゃんは何故かほりとす。

「わざわざすみません…」

カウンターの青年が勢いよく立ちあがり、静子は一瞬ぎょっとして立ち止まつた。

› 続く

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1371ba/>

---

冥土喫茶へ いらっしゃ~い！

2012年1月14日15時46分発行